

# 双曲割引モデルにおける公的年金政策

大阪大学大学院経済学研究科 博士後期課程 1 年

中坊 勇太

2014 年 4 月

## 概要

本稿では、双曲割引モデルに賦課方式年金を組み込み、閉鎖経済下で資本蓄積を考慮して一般均衡分析を行った。また厚生分析を行うことにより、年金を導入すべきなのはどういう場合か、また年金を導入することによって厚生は上昇するかを明らかにした。

得られた結果としては、唯一の定常点が存在し、その定常点が安定でありうることが示せた。また現在バイアスが大きければ大きいほど資本蓄積は減少し、また年金保険料が増加すればするほど資本蓄積が減少することが示せた。年金保険料と資本蓄積の関係については指数割引のケース ( $\beta = 1$ ) と同じである。

年金と厚生については、指数割引のケースでは人口成長率  $n$  と利子率  $r$  の大小 (動学的非効率であるか否か) が重要であった。本稿の双曲割引のモデルでは、生まれる直前ではかった生涯効用を最大化すべき厚生と見た場合、現在バイアスの値に依存しない結果となった。また若年期到達時点と中年期到達時点ではかった生涯効用を最大化すべき厚生と見た場合、 $n = r$  のケース (動学的非効率でない) において、年金導入によって厚生が上昇しうることが示せた。ただし、厚生が上昇しうる時、 $\beta = 1$  を代入しても同じ結果が得られたため、双曲割引モデル特有の結果ではないことが明らかとなった。さらに中年期到達時点で、若年期の過剰な消費を後悔すると仮定した場合に  $n = r$  のケース (動学的非効率でない) において、年金導入によって厚生が上昇しうることを示せた。このことは  $\beta = 1$  を代入した場合には起こり得ないことから、双曲割引モデル特有の結果であるといえる。